

<原著>

## 精神保健福祉援助実習における実習評価と顕在性不安との関連

柴原 直樹・井澤 嘉之・山田 州宏

### Relationships in Psychiatric Social Worker's Training between Evaluations by a Supervisor and Manifest Anxiety Scale

Naoki SHIBAHARA, Yoshiyuki IZAWA, Kunihiro YAMADA

The purpose of this research was to examine relationships in Psychiatric Social Worker's training between evaluations by a supervisor and the Manifest Anxiety Scale (MAS). One hundred and forty eight university students participated in this research. The results showed that the evaluations by supervisors were not correlated with the anxiety scale but correlated with the lie scale, and that the lie scale contributed to predicting the comprehensive evaluation.

Key words : PSW, MAS, practice evaluation sheet  
精神保健福祉士、顕在性不安、実習評価表

#### はじめに

精神保健福祉援助実習において行われる現場実習は、知識や技術を学ぶ講義や演習とは異なり、学生が実習生として利用者やその家族、現場スタッフとの関わりの中で精神保健福祉士とは何かを学ぶ実践の場である。このような複雑な対人関係の中に身を置くことで、実習生はこれまでにない極度の緊張・不安感による精神的・身体的ストレスを経験することになることが予想される。

高橋、鹿村、須藤 (2005)<sup>1)</sup> は、看護教育における臨地実習で、対象が特に精神疾患をもつ場合には実習生は強い不安やストレスを感じ、このため患者とうまくコミュニケーションが図れず、よりよい対人関係を築き上げるのが困難であると指摘している。精神

障害者との直接の関わりを経験したことがほとんどない実習生にとって、このような事態は実習の自己評価の低下を招き、実習適応感を低めるという悪循環に陥る傾向を生む(高橋・柴田・鹿村, 2006<sup>2)</sup>)。同時に、精神障害者の独特な精神状態に対し、危機感や恐怖感が否定的なイメージを作り上げる契機ともなっている(高橋・本江・古市・香月, 2011<sup>3)</sup>)。

これは、まさに精神保健福祉援助実習における現場実習にも当てはまる。精神障害をもつ利用者を理解し、彼らとの円滑な人間関係を構築することで実習達成感を高め自己評価を向上させることは、精神保健福祉援助実習における現場実習の重要な目標である。しかし、学生の実習に対する不安感やストレスが利用者とのコミュニケーションに支障をきたし、それが原因となって実習に対する自己否

表 1. 精神保健福祉援助実習評価表

(評価点の参考基準) A 優れている B 良好 C 普通 D 努力を要する	
評価のポイント	評価点
1. 専門職としての倫理(人権擁護、守秘義務の尊重等の義務)をわきまえて行動できた。	
2. 仕事上の責任 - 実習期間を通し出勤時間・規則の遵守・連絡・報告等 - がよくできた。	
3. 常に積極的、主体的に学習する姿勢があった。	
4. 本人の設定した課題に対して積極的に取り組んでいた。	
5. 実習指導者の指導助言を真面目に受入れ、それを活用しようとする姿勢があった。	
6. 実習施設・機関等の目的及び機能をよく理解して行動した。	
7. 利用者を理解し、ニーズを把握することができた。	
8. 利用者に対して適切な援助ができた。	
9. 集団に対して適切な援助ができた。	
10. 実習記録をはじめ各種記録を適切に取り、整理・保管・活用した。	
11. 自分自身の性格・行動傾向についてよく自覚し、洞察しながら実習した。	
12. 実習施設・関連施設の職員等とよい協力関係を作ることができた。	
13. 総合評価(上記の1~12の各評価の総合評価として)	

表 2. 調査対象となった学生数(括弧の中の数字は両機関で実習を行った人数)

年度	2009	2010	2011	2012	2013	2014
男性	19(1)	3	9	5	10(1)	2
女性	23(1)	19	16	16	10	2
計	42	22	25	21	20	4

定感を増幅させることも考えておかなければならない。

ところで、近村、小林、石崎ら(2007)<sup>4)</sup>および近村、石崎、小林ら(2007)<sup>5)</sup>はSTAI(State-Trait Anxiety Inventory)を使用し、実習前後における看護臨床実習生の状態不安と特性不安を測定した。状態不安(State Anxiety)は、「今まさに、どのように感じているか」というこの瞬間に自分に当てはまる不安を指し、特性不安(Trait Anxiety)は「ふだん一般、どのように感じているか」といういつもの自分に当てはまる不安を指す。したがって、状態不安が不安を喚起する事象に対する一過性の反応であるのに対し、特性不安は不安状態の体験に対する比較的安定した個人の反応傾向のことをいう。近村ら

の調査結果から、①実習生の特性不安および状態不安は、実習前から既に高いレベルにあること、②実習中は特性不安に大きな変化はないが、状態不安は有意に高まることが分かった。

そこで、精神保健福祉援助実習の事前学習が始まる3年次の学生の特性不安のレベルが、4年次の実習終了後の実習指導者による実習評価にどのような影響を与えているか調べることを目的として調査を行った。

## 方 法

対象者 2009年から2014年の6年間にかけて精神保健福祉援助実習に参加したK大学学生(4年生)の中で、データが利用可能な

表3. 実習評価点の男女別平均値およびt値と有意確率p

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
男性	3.20	3.15	2.81	2.94	3.23	2.77	2.54	2.57	2.51	2.90	2.75	3.25	3.00
女性	3.10	3.21	2.79	2.80	3.21	2.88	2.70	2.58	2.57	2.87	2.77	3.19	2.96
t 値	-.779	.417	-.126	-.828	-.127	.715	.966	.058	.357	-.126	.102	-.425	-.232
p	.438	.677	.900	.409	.899	.476	.336	.954	.722	.900	.919	.671	.817

表4. A 得点およびL 得点の男女別平均値およびt 値と有意確率p

	A 得点	L 得点
男性	23.3 (8.47)	4.5 (1.91)
女性	24.9 (8.48)	3.7 (1.80)
t 値	1.062	-2.383
p	.290	.019

148名を調査対象とした。

調査項目と調査方法 実習指導者による実習生（4年次）の評価は、K大学が作成した精神保健福祉援助実習評価表（表1参照）に記載されているものを利用した。実習評価表は13項目から成り、そのうち1項目は総合評価である。評価はA「優れている」、B「良好」、C「普通」、D「努力を要する」の4段階で行っているが、本研究においては、A = 4、B = 3、C = 2、D = 1に変換してデータ分析を行った。また、彼らの3年次における顕在性不安の程度をMAS（Manifest Anxiety Scale）を用いて授業中（5月から6月にかけて）に測定した。

## 結 果

MPIにおいて、「？」を10以上回答した11名およびL得点が11点以上の3名を除外した結果、134名（男性48名、女性86名）のデータが分析対象となった。その中で、医療機関および非医療機関（あるいは施設）の両方で実

習を行った学生は3名であった（表2参照）。

### 性差

実習指導者による実習評価点と顕在性不安および虚構得点の男女別平均値をそれぞれ表3および表4に示す。実習評価における13項目すべてにおいて有意な性差はみられなかった。また、MASにおける顕在性不安得点（A得点）には性差が見られなかったが、虚構得点（L得点）は男性の方が女性よりも有意に高かった。

L得点は、社会的に望ましいけれど実行するには困難な行動や態度に関する質問に対し、素直に回答しているか、あるいは自分を好ましく見せようとして偽って回答していないかを判定するためのものである。したがって、L得点が高い（11点以上）と妥当性に欠けることになる。

### 実習評価点

実習評価13項目における各項目間で高い正の相関が見られた（表5参照）。そこで、どの項目が総合評価（第13項目）に影響しているか調べるために、総合評価を目的変数とし他の12項目を説明変数とするステップワイズ法による重回帰分析を行った（表6参照）。その結果、総合評価は、項目3「常に積極的、主体的に学習する姿勢があった」、5「実習指導者の指導助言を真面目に受入れ、それを活用しようとする姿勢があった」、6「実習施設・機関等の目的及び機能をよく理解して

表 5 . 13項目における実習評価点の相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1	1	.703**	.600**	.594**	.714**	.690**	.608**	.590**	.600**	.644**	.654**	.641**	.728**
2		1	.561**	.579**	.711**	.571**	.508**	.445**	.453**	.643**	.586**	.587**	.660**
3			1	.755**	.692**	.627**	.652**	.534**	.585**	.565**	.580**	.658**	.766**
4				1	.707**	.673**	.647**	.620**	.653**	.683**	.697**	.640**	.780**
5					1	.674**	.637**	.542**	.568**	.717**	.702**	.775**	.792**
6						1	.763**	.703**	.705**	.582**	.665**	.717**	.808**
7							1	.778**	.760**	.518**	.618**	.655**	.768**
8								1	.858**	.417**	.633**	.631**	.722**
9									1	.467**	.691**	.658**	.775**
10										1	.706**	.584**	.717**
11											1	.725**	.823**
12												1	.798**
13													1

\*\*  $p < .01$

表 6 . ステップワイズ法による重回帰分析の結果

実習評価			
$F(5, 121) = 172.23, p < .001$			
$R = .936$			
$R^2 = .877$			
評価項目	$\beta$ 係数	$t$ 値	有意確率
項目 6	.264	5.054	.000
項目 11	.266	5.122	.000
項目 3	.247	5.256	.000
項目 9	.177	3.517	.001
項目 5	.149	2.851	.005

行動した」、9「集団に対して適切な援助ができた」、11「自分自身の性格・行動傾向についてよく自覚し、洞察しながら実習した」の5項目によって説明が可能であることが分かった。

#### 実習評価点と A 得点および L 得点

実習評価の13項目のうち、A 得点との間には有意な相関関係がみられたのは項目 3 のみであった。しかし、L 得点と項目 3、6、7、8、9、11、13 との間には有意な負の相関が検出された(表 7 参照)。さらに、総合評価点(第13項目)を目的変数とし、A 得点および L 得点を説明変数とするステップワ

イズ法による重回帰分析を行った結果、総合評価点に L 得点が影響していることが分かった。

また、A 得点と L 得点の間に有意な負の相関がみられた( $r = -.340, p < .01$ )。これは、顕在性不安が高くなるほど虚偽反応は少なくなることを示している。

## 考 察

顕在性不安(いわゆる特性不安)は比較的安定した性格特徴であり、不安状態の経験に対する個人の反応傾向を表している。本結果から、3年次に測定された顕在性不安は、4年次における精神保健福祉援助実習評価にほとんど影響を及ぼさないことが分かった。ただし、項目 3「常に積極的、主体的に学習する姿勢があった」については、顕在性不安が高まるほどその評価が良くなる傾向にあった。

一般に、実習生の特性不安は実習前からすでに高いレベルにある(近村ら、2007<sup>4)</sup>)ことが知られている。本研究では、3年次の事前学習の段階で対象者の56%が不安レベル I(高度の不安)と II(かなり不安度が高

表 7. 実習評価13項目と不安尺度 (A) および虚偽尺度 (L) との相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	.147	.120	.172*	.076	.100	.078	.062	-.002	.001	.048	.156	-.001	.115
L	-.034	-.090	-.173*	-.165	-.087	-.170*	-.221*	-.215*	-.247**	-.066	-.235**	-.076	-.173*

\*  $p < .05$       \*\*  $p < .01$

表 8. ステップワイズ法による重回帰分析の結果

実習評価			
$F(1, 131) = 4.038, p < .05$			
$R = .173$			
$R^2 = .030$			
尺度	$\beta$ 係数	t 値	有意確率
L	-.173	-2.009	.047

い)にあることが分かった(図1参照)。また、図2に示すように、実習生の90%弱がIからIII(普通)の不安レベルにあり、それぞれのレベル間で実習評価A、B、Cを受けた実習生の割合にはあまり差がみられなかった(ただし、レベルI・IIでD評価の実習生の数は0)。つまり、不安のレベルが実習評価の成績に関係しているとは言えない。

では、実習生のどの側面が実習評価に影響を及ぼしているのでしょうか。実習中は、特に実習準備や課題、レポート作成などに忙しく、余暇や趣味、娯楽等に費やす時間が減少し生活の変化が生じる(近村ら、2007<sup>5)</sup>)と言われている。ヒトは睡眠によって過度のストレスや免疫機能低下から身を守っている(高橋、2003<sup>6)</sup>)が、睡眠不足になると心身ともに疲労し、これが原因で実習指導者や精神障害者との人間関係に支障をきたすことも考えられる。したがって、実習中の生活リズムをうまく調整しているかどうか、実習評価に影響を及ぼす要因の一つと考えられる。

また、重回帰分析の結果から、実習生の積極性や主体性、あるいは勤勉性といった性格特性や、実習指導者や精神障害者とのコミュニケーション能力などの社会的スキルが実習

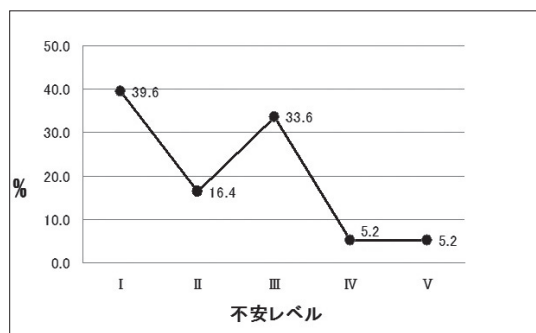


図1 I~Vの不安レベルに属する実習生の割合 (%)

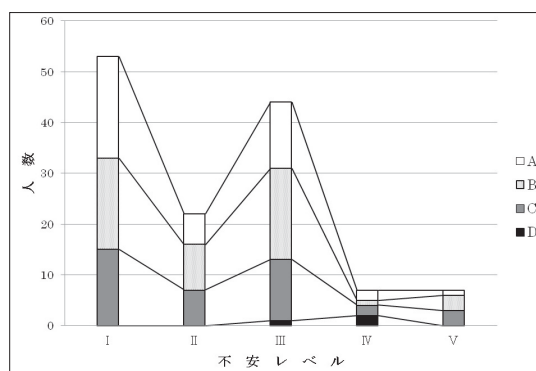


図2 I~Vのそれぞれの不安レベルでの、実習評価A~Dの割合

の総合評価に関連していることが示された。

さらに、L得点が高い実習生ほど、①主体的・積極的な学習態度、②利用者の理解や援助、③自己洞察力といった面で実習指導者の評価が低くなる傾向にある。また、総合評価についても、このL得点が高いほど低くなる傾向にある。L得点が高いということは、質問に対し自分を好ましく見せようと構えて素直に回答していないことを示している。したがって、L得点の高い実習生は、現場実習において望ましい行動や態度であるけれど、

そうすることは実際には困難である場合に、自分をよく見せようとしてあたかも可能であるかのような言動をするため、実習評価が低くなると考えられる。

まとめると、顕在性不安が高い（あるいは低い）からといって、実習指導者による評価が変わるわけではない。むしろ、実習生の性格特性や社会的スキルが実習評価に影響を与える。現在の自分の状態、ありのままの自分を内省することなしに、自分を必要以上によく見せようとする言動は実習評価の低下を招く。

学・社会学6、東京：じほう、2003

## 引用文献

- 1) 高橋ゆかり、鹿村真理子、須藤絹子：看護学生の臨地実習におけるコミュニケーションの良否に関わる要因、群馬パース大学紀要、1、19-26、2005
- 2) 高橋ゆかり、柴田和恵、鹿村真理子：看護学生の实習適応感に関する研究(第3報) -実習適応感に影響を与える要因の分析、群馬パース大学紀要、2、255-262、2006
- 3) 高橋ゆかり、本江朝美、古市清美、香月毅史：精神看護学実習における看護学生の対人ストレスコーピング、上武大学看護学部紀要、6(2)9-19、2011
- 4) 近村千穂、小林敏生、石崎文子、青井聡美、飯田忠行、山岸まなほ、片岡健：看護臨床実習におけるストレスとコーピングおよび性格との関連、広島大学保健学ジャーナル、7(1)15-22、2007
- 5) 近村千穂、石崎文子、小林矩、青井聡美、飯田忠行、小林敏生：看護臨床実習におけるストレス状況と性格の関連、人間と科学、県立広島大学保健福祉学部誌、7(1)187-196、2007
- 6) 高橋清久：睡眠学-眠りの科学・医歯薬